

---

# 名無しの物語

創離

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名無しの物語

### 【Nコード】

N5924U

### 【作者名】

創離

### 【あらすじ】

あれは暑い暑い夏休みの事だ。彼との楽しいデート、その最後に最悪な体験をした。5,000字も読めるのなら、少しの間私の語りに付きうが良い

(前書き)

なげえ!?

ちよつとした息抜きで書いてたはずなのに、こんなに長くなるとは。

読んでもらえないんじゃないか

30度を超える夏休みのある日、としか言いようがない。

何日だったかなんて覚えていないが、宿題の安否を気にしだした頃だから8月の終りの方だろうか？

まあ、そんな日付なんかで行を使うのはもったいないものだ、先に進める。

ここから語る物語は、私の日常で起きたたった少しの非日常の話。うる覚えの語りだ、幾つもほころびがあるし、私の妄想の中だけの物語かもしれない、それが嫌なら今すぐページを閉じる。

……それでもいいのなら、少しの間私の語りに付き合おうがいい。

朝、テレビを付けると30度を超えたと書いていたが、おそらく正解だ。こんなに暑いのに30度以下なんて信じられない。

そんな暑い暑い町の中、彼は”長袖”だった。

「お前は馬鹿か」

「もうイントネーションが疑問形でもないのですか」

「馬鹿確定だ」

「相変わらず酷いなあ」

「うるさい、見てることちが暑くなる。今すぐ死ね」

「確かに今死んだら皆が涼しくなるでしょうね。血とか出て」

「血が出ない死に方もあるだろう」

「その時はホラ、『感染症じえねえ！?』とか言っつて背筋ぞぞぞつと」

「いいから店に入るぞ」

「了解です」

そう言っつて適当に選んだ店に入っつて行く。

「いらつしゃいませー」

「2人だ。クーラーの下に連れて行ってくれ」

「かしこまりました」

クーラーの下に来たは良いが、真下に連れてこられるとは。

「この店員は馬鹿なのか」

「悪口はいけませんよ。悪口を言うなら、ホラ、僕にどんどん言うて下さい」

「うるさい、だまれ、死ね」

「ああ、そうですそうです」

「10日会わない位じゃ人は変わらんか」

「寂しかったですか？」

「ほざけ。むしろゆっくり出来て良かったわ」

「またまたー、強がっちゃってー」

「パフェのお客様」

「私だ」

「どうぞ」

私の前にパフェが並べられる。

「ピザのお客様」

「私だ」

続いてピザが置かれる。

「ハンバー」

「私だ」

ハンバーグセットが並びきらず、ずらして置かれた。

「トロピカル」

「私だ」

トロピカルジュースを受けとり、自分の右側に置いた。

「以上4点でよろしかったですか？」

「ああ、下がれ」

「ごゆっくりー」

私は溶けないようにパフエから口に入れる。

「相変わらず大喰らいですね」

「レディーになんて事を言うんだ」

「そんな量食う人間をレディーとは言わないんですよ？ 人はそれを馬鹿と呼ぶ」

「馬鹿は君だ」

パフエがなくなりピザに移る。

話の途中で失礼。

まあ、ここから他愛もない話をして、飯を食った訳だ。

短編ゆえにそこはカットしよう。

なに、恋愛小説ではないのだ。惚気話を飛ばす事も重要だろう？

この後、夕方まで遊んでなあ。まあ、何時までかは覚えていないがね。

そんな訳でついに私の体験した非日常の話へと移るのだよ。

「うむ、今日は楽しかったぞ」

「トリックアート面白かったですねえ」

「その事は忘れたまえ。いや、忘れる」

「怖いです怖いです」

彼は怯えたように手を振る。

「まったく、人の弱みばかり握ろうとして」

「あれ？ 自分の事ですか？」

「一回死ぬか？」

「遠慮します」

「そうか。死にたくなったら言いたまえ。望む方法で殺してやろう」

「……その時が来たらお願いします」

苦笑いで返事を返す彼はやっぱり可愛いものだ。

「あ、すいません。仕事の電話が」

言われて気付くと、彼の電話は着信音を上げていた。

「甲斐性なしが」

「ははは」

彼は少し離れて行くので私もベンチに座って待つ事にした。

「はあ」

なにもする事がないとは、退屈だ。

当たり前だが。

退屈が人を殺す。

現代社会の常套句だな。

まったく、誰考えたのやら

「……ちや……ちよ……お……ね」

まったく、その通りじゃないか。

「お譲ちゃん、ちよつと、ねえ。お譲ちゃん？」

気付くと妙な男が目の前に立っていた。

「やっと気付いてくれた」

「なんだ、何か用か」

「うん、ちよつとね」

「ナンパなら間に合っている。他を当たれ」

「ああ、そうじゃなくて」

なんなんだ、この男は。

「死にそうだったから」

「……はあ？」

「お譲ちゃん、死にそうだったからつい声かけちゃった」

にこやかに笑っているが、なんだなんだ。

私の歴史で初めてだぞ。ドラマでも聞いた事がないぞ。

「死にそうだったから」

なんだ、こんなセリフで女が落ちるとでも？

いや、最近の頭の軽い女ならあるいは。

「まあ、一応これもつといて」

そう言って鈴を見せる男。

なるほど、理解した。

これが噂のキャッチセールスだな。

「金は」

「ただでいいよ」

先手を取られた。

「疑うのは良い、壊してもいい、警察に行っても声を上げてもいい。でも、これを捨ててはいけないよ。危機が去るその時まで、これを持っておき」

手に握らされたそれは、見た目よりも重く感じた。

「それじゃね、お譲ちゃん」

「……」

颯爽と去っていく男には未練も何もないように去っていく。

「なんだったんだ」

お気づきの通り、この鈴の所為で非日常に巻き込まれる訳だが、私はこの男に感謝している。

これがなければ、私は死んでいたからな。

ま、同時にこいつの事を恨んでいるがね

ふふふ、次に会ったらお礼を言ってお殴らないと。

「大丈夫でしたか？ ナンパとかされませんでしたか」

「いや、」

あれは、別に言わなくてもいいだろう。てか、言いたくない。

「だいじょうぶだ」

「セリフが棒読みですが」



「よし、いくぞ」

「セリフがひらがなですが」

「なにをいつているんだ、このばかは。ははははは、ばかだなあ」  
「どうだ、私の迫真の演技は!!」

「はあ、分かりました。それじゃ、約束通り最後の場所に行きましようか」

デートの最期の場所、海岸に着く頃にはもう夜になっていた。

コンビニにも寄ったからな。

「さあ、御望み通り夜の海ですよ」

「ふむ、悪くない。静かな海は良い。昼はうるさいからなあ」  
潮風が気持ちいい。

「さて、始めますか」

「そうだな」

コンビニの袋からあれを取り出す。

「ライターを貸して下さい」

「ほれ」

「火傷しないように気を付けてください」

先の紙の部分に火がついたそれを受け取った。

ジャー

とでも表現するべき音を立ててそれは火を噴きだす。

「安物の分際で、なかなか綺麗じゃないか」

「日本の花火を馬鹿にしちゃいけません」

「どうせ中国製だろ？」

「日本の技術だからいいんです」

「ふふふ。まあ、どこの技術でも構わん」

そう、それは些細なことだ。

「私をここまで幸せにするのだ。褒めてつかわす」

「あなたらしい言い草ですね」

「そつちもこつちに寄せ」

私は彼からも一般花火を受け取る。

「ライターはまどろっこしい。移し火だ」

「あ、私もお願いします」

私は彼の花火にも点火してやった。

ふふふ、結局惚気てしまったな。

まあ少しくらいは良いだろ？

この後置き型とか線香花火とかしてなあ、楽しかった。

花火大会以外の花火なんてあれが初めてだったからなあ。

ま、それもあれの所為で台無しになつたんだがな

「これが最後の線香花火です。ついでに他の花火ももうありません」

「そうか、終りとは哀しいものだなあ」

「その儚さも花火の魅力ですよ」

構えた線香花火に彼が火を付けてくれた。

「……」

「……」

5分にも満たない時間、二人で一つの花火を眺め続けた。

「……」

「……」

終りを告げるように落ちて行く花火。

「……」

「……」

どちらが意識した訳でもなく、自然に顔が近付いて行った。

「……」

「……」

「……待て！」

彼は驚いたように顔を離す。

「どうしたんですか」

「誰か来る」

さすがに誰かの前と言うのは恥ずかしい。

「別に見せつけてやれば良かったじゃないですか」

「君は馬鹿か！」

「貴女のためなら馬鹿にもなりましょう」

「うるさい！ 黙れ！ 死ね！」

本物だ、本物の馬鹿がいる。

そうこうしてる間に人影は近付いて来た。

「あ、こんばんわ」

彼は気さくにあいさつを返した。

リン

その瞬間、まるで鈴のような音が鳴り響く。

リン

もう一度、この音はなんだろう？

「う……うあ……が」

気付くと目の前の男は苦しみ始めた。

「大丈夫ですか？」

彼は彼に歩み寄ろうとした。

「待て、その男」

「どうしたんですか。さすがにほっておくと言うのは」

この目を見た事がある。私の父親と同じ目だ。

「少し下がっている、こいつ薬中かもしれん」

「薬中って、分かるんですか」

「さあ、見た事があるだけで知識がある訳じゃないからなあ」

「とりあえず、背中をさ」

「うがあああ！」

馬鹿の様な奇声を上げて迫って来る。

「すいません、すぐに逃げましょう」

「いや、背中でもさすってやりなさい」

「いえ、逃げさせてください」

「よし、逃げるぞ」

私達は走る。

が、あいつはケタ違いに早く

「うがあああ！」

私は背中を殴られ、前のめりに吹き飛ばす。

「はあああ」

手をつき、なんとか立ち上がるうとするが足が言う事を聞いてく  
れなかった。

「大丈夫ですか？」

「馬鹿もの、早く逃げたまえ」

「いえ、そんな事は」

「いいから」

もう、奴はそこまで迫って来ていた。

「うがあああ！」

ああ、たぶんもう終わりだ。

「ちくしょう！ これでも喰らえ！」

彼の投げた木の枝は、かなり太い奴だ、見事に奴に命中。頭から  
血が流れているようにも見える。

「うがあああああああ！」

「やはり、効果がないか」

「ええ！？ だって血が出てますよ」

「戦争中は麻薬を打つことで痛みを感じなくさせていたそうだが」  
「そんな」

ちなみに麻薬の効果はもう一つある。

「うがああああああ！」

奴の拳が彼をとらえた。

「うっ……」

彼は私より後ろに吹っ飛ぶ。

そう、麻薬を打つことで一時的に馬鹿みたいに身体能力が上がるのだ。

「ここまで来てるって事は相当なジャンキーだな」

「うがああああ！」

「ははは、獣か何かか。もう人間の言葉も分かんとはもう、ダメだ。」

諦めるしかない。

別に殺されようが、その間に彼は逃げられるだろうし。

犯されようが、先に彼と済ませているから思い残すこともない。

「うがあああああ！」

奴は砂を巻き上げながらつつこんでくる。

目を閉じると、何か鈍い音がした。

さながら骨が折れたような。

「……」

目をゆっくり開けると、辺りは光っていた。

「なんだ」

光の元らしいポケットに手を入れると、出てきたのは鈴だった。

「ああ、あいつに貰った訳の分からない」

「それ、なんですか？」

「さあ？」

精一杯笑って見せる。

「なんだろうな」

奴は立ち上がるうとするが、

「う……」

何処か骨が折れたのか、立ち上がるのに手こずっていた。

「今のうちに逃げましょう」

「君を置いてか」

「そうです、俺を置いて逃げるんです」

「馬鹿か」

「貴女のためなら馬鹿にもなりましょう」

「うるさい！ 黙れ！ 死ね！」

「ははは」

「だが、死ぬのは私に殺されて死ね！ お前の望む殺し方で殺してやる」

「……」

「死に方を選んどけ、殺してやるから」

だから

「だから、私が殺すまで死ぬな。ここから逃げるぞ」

「……あなたの望むままに」

「ふん！」

まったく

「?!」

気付くと手には鈴でなく何か棒のようなものが握られていた。

「なんです、それ」

「さあ？ 武器には詳しくないからな」

月灯りを浴びて光るそれは、西洋の剣だろうか？ そんな形状だった。

「さすがにそれで斬ったら殺しそうですけど」

「……峰打ちで」

「両刃ですよ」

「……」

「そもそも、腰が抜けてて動けないでしょう」

「うがああああ！」

奴は立ち上がったようでこちらを向いている。

「コッチに来るな！」

でたために振り回すと辺りがまるで昼の様に明るくなる。

「「?!」」

なんと言うのだろうか。いわゆる、ビーム？ が、出ていた？

「あれ？」

「なんですそれ？」

「さあ？」

「奴は？」

「さあ」

奴は跡形もなく消え去っていた。

別に死体が残らなければいいか、と言うことであのまま帰ったが、実に不思議な体験をした。

と言うか、駅で気付いたんだが服装がなぜか変わっていてな。なんかメイド服みたいになつてた。

それで駅まで町の中を歩いていったんだ。

気が動転してたが、今思えば剣を片手に持ったメイドが夜の街を闊歩していた訳だ。

考えるだけで気が狂いそうだ。

次の日、鈴に戻ってたから捨てた。

あの男、絶対狙ってた。

私に恥をかかせるためにあれを寄こしやがった。

次に会ったら絶対に殴る。干発位。

あ、ああ、済まない。話が脱線したな。

ま、と言つてもこの話はそこで終わりだ。

別にこれ以降変な奴にも遭わなかったし、悪の秘密結社とも対決しないよ。

彼と私は今もラブラブだし、あれが何だったのか知る気もない。

私の語りはここでおしまいだ。

長い間付き合わせて悪かったな。

しかし、私の中の物を吐き出せてすっきりした。  
これから先が知りたければ好きに先を作ればいい。  
私が次々と何かを倒してもいいし、秘密結社をつぶしてもいい。  
ただ、私の語る私の語りはこれで終わりだ。  
付き合ってくれた諸君らに感謝しよう。

ありがとう、そしてさよならだ。



(後書き)

最後までお付き合いいただきありがとうございます。

謎の解決をせず、謎のまま残す

この謎を物語の余韻として楽しんでいただければなあと、思います  
あの男が何者なのか、奴は何だったのか、鈴は何だったのか、そ  
う言った物語に残った謎を想像して楽しむのも小説の楽しみ方だと  
筆者は強く思っております。

あ、最後に

お疲れ様でしたー！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5924u/>

---

名無しの物語

2011年7月5日03時27分発行